

IV小学生を対象とした取組

〈小学生について〉（案）

小学校低学年（1～2年生）は、読み聞かせを聞くことから一人読み^{※1}に移行し始める時期です。文字を覚えて自分で読み始めますが、内容理解の負担は大きく、周囲の支援を得て、音読を繰り返すことで徐々に黙読ができるようになります。読む力に配慮し、読書の楽しさを感じることができる本との出あいを図ることが必要です。

一方、読み聞かせてもらおうと、読む負担がなく、豊かに想像したり共感したりできます。本の世界を十分に楽しむことができるので、大人が読み聞かせを継続することが大切です。

中学年（3～4年生）は、学校の授業で調べ学習^{※2}の機会が増え、本を通して興味や好奇心が引き出され、疑問を解決できることを学びます。また、読書動機付けでいろいろなジャンルの本やそれぞれが夢中になれる本と出合うことで読書習慣がついていきます。一方、読書に苦手意識を持つ子も出てきます。学校図書館等で、ひとり一人への支援が欠かせません。

さらに、図書館等の日常的な活用や、家読^{※3}でのふれあいで読書意欲が高まり、読書が生活に根づくことが期待されます。

高学年（5～6年生）は、読書を通じ体系化された知識を得て、考察することで、自分の世界の広がりを感じられるようになります。インターネットによって得られる膨大な情報の確かさを見極め、必要なものを選択するために客観的な視点を育むことが有効です。この段階では、本を中心とした調べ学習にゆっくり取組み、ていねいに考える力を養い、自分の内面が変化する体験を積むことが望まれます。

また、思春期が始まり、自他の心身の変化に戸惑うことも出てきます。幅広い読書によって、本の中に共感できる人物や問題解決の糸口を見つけたり、居場所をみつれたりすることができます。本が見えない形で生きることを支えているといえるでしょう。

子どもの発達段階に合った読書活動の環境を整備し提供していくために、引き続き周囲の大人の連携と積極的な支援が求められます。

一人読み^{※1} ひとりで音読したり、黙読したりすること

調べ学習^{※2} 第4期P17脚注参照

家読^{※3}（うちどく）「家庭読書」の略語。本を通じて家族がふれあい、コミュニケーションを深めることが目的。方法には保護者の読み聞かせや子どもが家族に読み聞かせることも含む。